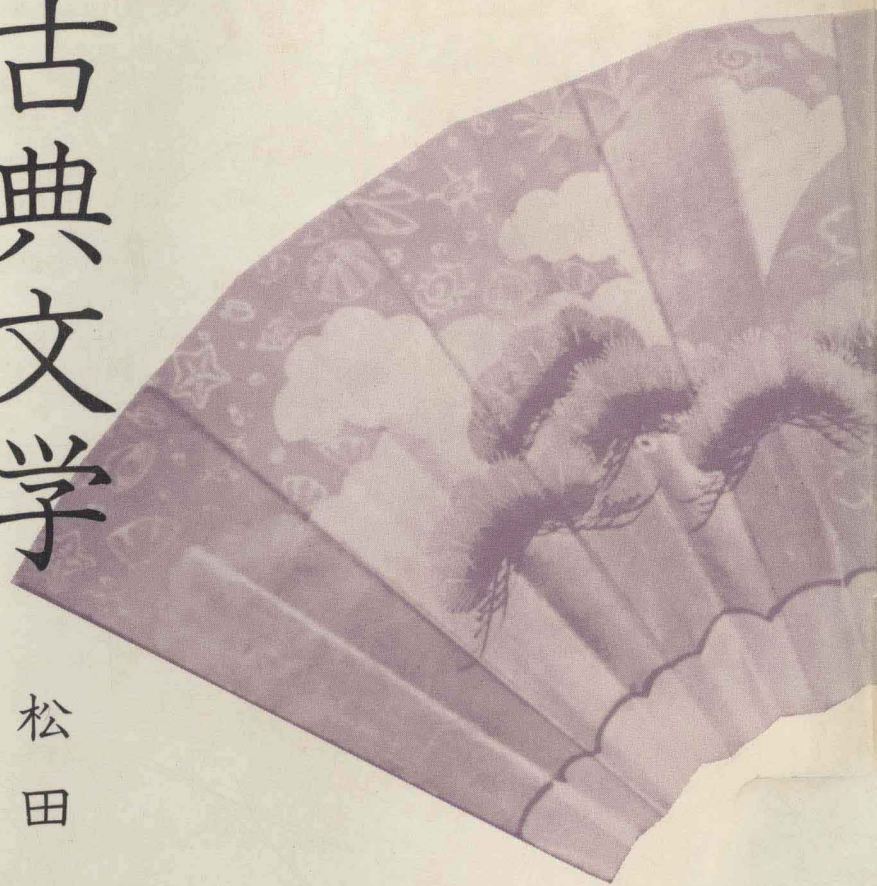


能と古典文学

松田 存著



能と古典文学

松田 存著

《著者略歴》

松 田 存 (まつだ たもつ)

1934年生れ。

二松学舎大学文学部国文学科卒 同大学院文学研究科国文学専攻修了

現在 二松学舎大学・国際商科大学講師

《主要著書》

『世阿弥と能の探究』『能の美』『能・狂言入門』『日本文学の展開』

『世阿弥伝書解題(全)』(私家版)『元和卯月本謡曲百番』(共編)

『中世芸能史料集』(共編)

《所属学会》

中世文学会・説話文学会・日本演劇学会・日本歌謡学会・

I T I 日本センター・芸能史研究会・能楽懇談会

現住所 ☎ 121 東京都足立区六町 1-12-10

能と古典文学

3391-339102-2449

昭和56年11月10日 初版発行

著 者 松 田 存

発 行 者 里 見 匡

発 行 所 東京都渋谷区道玄坂1丁目15番3-205号 株式会社 公 論 社

郵便番号 150 電話 東京(03)476-3157 (代表) 振替 東京 8-196170

© 1981 Koron Sha

印刷 社光舎印刷株式会社 製本 誠製本株式会社

序 謡いの追求を

飯塚 友 一 郎

二松學會大学名誉教授・文学博士

松田存君といえ、脇目もふらず能楽研究に精進されてきた篤学の士、私などの心がけている演劇学は、この錯綜多端をきわめた文化現象を、一本に体系化しようとするのだから、勢い観念的な無理がまゝ頭をもたげる。そこで、むしろ私どもは、能楽という特殊な演劇現象については、松田君の専門的な肌理こまかな研究に教えを乞わなければならないと思う。

V
何よりもまず、能乃至謡曲は「文学」である。すでに先覚故野上豊一郎博士は「能は演劇にあらず」と看破されている。思えば、わが国民文学は驚くべき種々雑多な表現方法を用いる。「語る」「唱える」「歌う」「唄う」「唸ずる」「謡う」「舞う」などと、数えあげれば限りがない。今、その一々を吟味する暇はないが、能の謡曲に限って「謡う」という言葉を用い、「歌う」とも「唄う」とも言わせないのは何故か。おそらくこれは謡曲文学に限った特殊な発声法が自然に発生したか、定められたかではあるまいか。

「謡」の語原をたずねると、もとは楽器なしで、もしくは楽律にこだわらずに、而も発声が逍遙の遙に当るゆらめき、さまよう意味だという。従って童謡とか歌謡曲などが、その本意を伝えるのであろう。もともと文学の起りは語るか、うたうものであったろう。その猿楽が文学化され作曲化されてゆく、その過程における天才が世阿弥であらう。

世阿弥については、著者はすでに克明な研究書を発表されているが、本書では彼の能作論、つまり劇作法をさらに追求されている。私は今さら気がついて見ると、世阿弥はどこにも「劇」とか「戯曲」とかいふ語を用いていない。而も中国では古く春秋戦国時代から「戯」や「劇」の語があった。

謡曲の観賞論や曲目解説は著者の得意の壇上で、大きな教示をうける。ほんの一言無辞を呈して新著誕生のお祝まで。

昭和五十六年十一月

目次

序	謡いの追求を	飯塚友一郎……	V
---	--------	---------	---

第一部	能と先行古典—素材篇—	……	1
-----	-------------	----	---

はじめに	……	3
------	----	---

第一章	『古事記』『日本書紀』と『風土記』	……	9
-----	-------------------	----	---

	「玉井」と「わだつみのいろこの宮」	……	12
--	-------------------	----	----

第二章	『万葉集』と能（謡曲）	……	20
-----	-------------	----	----

	一、大和三山歌と「三山」	……	21
--	--------------	----	----

	二、生田川伝説と『万葉集』所収歌「求塚」	……	25
--	----------------------	----	----

三、上野の佐野の「船橋」の成立	30
〔参考〕1 謡曲への引き歌一覧	34
〔参考〕2 復曲「松浦佐用姫」台本	38
第三章 勅撰八代集と能（謡曲）	42
小町物の能	46
〔参考〕『古今和歌集』仮名序	55
第四章 『伊勢物語』と『源氏物語』から	61
『伊勢物語』	61
〔参考〕1 「源氏物語表白」	69
〔参考〕2 「源氏物語願文」	70
第五章 『大和物語』と説話集から	72
『大和物語』	74
『撰集抄』	82
『古今著聞集』	87
第六章 前記軍記物語	91
▽源氏方関係曲	91
▽平家方関係曲	93

〔参考〕『平家物語』灌頂卷	97
第七章 後期軍記物語	100
『太平記』と唐物	100
『義経記』と『曾我物語』	103
〔参考〕白居易『長恨歌』	108
第八章 その他の曲	111
一、越後松之山の鏡が池伝説	112
〔参考〕坪内雄藏著『国語読本』卷六（明治三十四年）	116
二、能（謡曲）にみる中将姫伝	117
——「雲雀山」と「当麻」から——	117
三、能「谷行」をめぐる	122
第二部 世阿弥能作論	131
第一章 『風姿花伝』花修云	133
解 題	133
花伝第六花修云——本文——	137
第二章 『能作書』（三道）	142

解題	142
『能作書』(三道)―本文―	149

第三部 鑑賞篇―曲目解説―	157
---------------	-----

翁	159
脇能物	161
修羅物	166
鬘物	176
四番目物	189
切能物	206
あとがき	217

第一部 能と先行古典―素材篇―

はじめに

わが国の誇る三大古典芸能の一つである能は、文楽（人形浄瑠璃芝居）や歌舞伎よりもひと足早く、今から約六百年前の室町時代（一四世紀初頭）に、観阿弥（一三三三～一三八四）世阿弥（一三六三～一四四三）という父子によって大成された舞台芸術である。

その台本である謡曲は、いわゆる「謡う文学」として、中世の文学に独自のジャンルを創造したのであり、その多くが、説話や物語、あるいは詩歌といった先行の文学に素材を求めているのであるが、それらの古典文学遺産が、謡曲独自の手法によって、もっとも効果的に再生され、能という独自の舞台芸術の形式と方法によって時空を超越した普遍的な主題を保ちつつ、二十一世紀を迎えようとする今日まで伝えられているのである。そこには、もっとも機能的に様式化された象徴化の方法によって、極度に純化された主題や思想を受けとめることが出来るとともに、われわれは、おのずからにして、その素材となっている説話や物語、あるいは詩歌といった、先行の古典文学の世界に導かれるのである。

つまり、われわれは『古事記』『日本書紀』をはじめ、『万葉集』や『古今集』、あるいは『源氏物語』『伊勢物語』、軍記物語としての『平家物語』や『源平盛衰記』といった古典を読むことによって、そこに描

かかっている人物なり情景なりを、ある程度は想像することが出来るが、能という舞台芸術は、謡曲という詞章と音曲、および「そのものに成り入る」人物の象徴的な演技「型（かた）」を見せ聞かせることによって、それらの古典の世界をまざまざと具象化してみせるのである。

『記紀』や『万葉集』、あるいは『源氏物語』や『伊勢物語』といった古典が、われわれの先祖の遺産であると同時に、能という舞台芸術もまた、われわれの先祖の大きな遺産であることを忘れてはならないであらう。

さて能には、観世・宝生・金春・金剛・喜多といったいわゆるシテ方五流を通じて約二百五十六番の現行曲があるが、台本（謡曲）のみの番外曲や廃曲・未刊曲を記録の上から数えると、実に二、三千番にも上るであらうか。したがって、現行曲二百五十六番は、ほぼその大成当時からおおよそ数百年の間、観阿弥・世阿弥という父子をはじめとする数多の演者によって上演され続けて来た、いわば伝えられるべくして伝えられた佳曲なのである。

それらの現行曲の中には、単なる説話や巷説に素材を求めている曲もあるが、その大半は、たとえわずかな語句の引用にしろ、何らかの形で先行の古典にその素材を求めているのである。そこでこれから、われわれに親しまれている古典の世界を、能という舞台芸術を通してみて行きたいと思う。

一回の能の正規の上演形式は、「能にして能にあらず」といわれているほどに、儀式的要素の強い「翁」を最初に、いわゆる五番立で上演される。それは、能の大成者である世阿弥の伝書（『能作書』）に「序破急に五段あり。」とあるように、もとは雅楽の用語であった緩急の変化を律する基礎原理にのっとり、連

歌や能でも重んじられるようになったもので、その主題は神・男・女・狂・鬼にあてはめられ、江戸時代、シテ方五流の大夫に一番ずつ舞わせたという式楽の名残りをとどめているとみることもできる。しかし現在、年一回、能楽協会主催・東京都の後援で催される式能が、この上演形式で行なわれる位で、普通の催しでは、能三番に狂言二番、能二番に狂言一番といった形式で上演されることが多く、そのほかに、連吟・素謡・仕舞・舞囃子・番囃子・一調などという特殊の演奏形式が入って番組の編成がおこなわれている。もちろん、このような特殊の演奏形式は、何も最近になっておこなわれるようになったのではなく、それぞれにかなり古くから存在していたのである。

それでは次に、五番立能の曲目の分類についてのべておこう。

脳能物

おおむねその主題が神社の縁起とか神の事蹟などで、舞台では、勅使とか臣下といったワキの登場について、初めに神の化身である老翁とか尉姿のシテが現われて神社の縁起とか事蹟を物語り、後にその本性である神体を現わし、神仏讃仰の舞―神舞・働・楽・真ノ序之舞・中之舞・神楽・獅子舞などを舞ってみせるというものであり、約四十余番がこれに属している。

もともと協能というのは、「翁」について上演されることからの呼称であり、神が主題であるところから神能物、あるいは初番目物とも呼ばれている。

その扮装は、おおむね前シテでは小尉（小牛尉）の面に小格子の着付で白大口をつけるとか、朝倉尉又は三光尉の面に無地鬘斗目の着流しとか、あるいは笑尉の面にするとかの別があり、後シテも、神舞物なら邯鄲男の面に黒垂・透冠をつけ、厚板の着付に狩衣・白大口という扮装であり、また真ノ序之舞物なら

敵尉または石王尉の面に白垂・初冠^{ういかんむり}をつけ厚板または小格子の着付に狩衣・紅大口であり、中之舞物なら増女の面に黒垂・天冠をつけ、摺箔の着付に長絹・緋大口、舞が染なら悪尉の面に白垂・鳥兜をつけ厚板・狩衣・半切、働物なら大飛出または黒髭・小癭見・天神などの面に唐冠・竜戴などをつけ、厚板・法被・半切といった扮装になるのである。

修羅物

曲中の主人公が修羅道に堕ち、仏教という六道―地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上―の境においてその苦患を受けるという意味からの呼称であり、そうした意味から、修羅物の能はきわめて仏教との関連が深いものといえる。

修羅物の主人公（シテ）は、「巴」をのぞくほかすべて男性であり、「田村」をのぞいて源平いずれかの武将である。現行曲の十六番が修羅物に属しているが、簾・田村・屋島の三番を勝修羅と称し、実盛・朝長・頼政を三修羅、実盛・通盛・盛久を三盛などと呼んでいる。そして協能Ⅱ初番目物について上演されることから二番目物とも呼ばれており、序破急五段の原則からは破の序にあたり、修羅道の苦患を表現する意味において、おおむね翔（カケリ）という舞事がおこなわれる（うち敦盛と生田敦盛は中之舞で、兼平・清経・実盛・知章・巴・朝長・頼政には翔がない）。

その扮装は、後シテで、勝修羅は平太の面に厚板・袷法被・半切、その他の曲は中将または敦盛（専用面）・十六などの面に唐織又は縫箔・単法被・白大口で、垂髪と梨打烏帽子^{なしうちえぼし}（右折れ―平家―左折れ―源氏―の別がある）に白鉢巻を結んで太刀を佩く。但し「実盛」は老将なので朝倉尉または三光尉の面に白垂髪をつけ、「頼政」は専用面で、烏帽子の代りに専用の頭巾を被るなど、比較的に主題の統一されてい

る修羅物にもこうした扮装の違いがある。

鬘物まつもの

主人公（シテ）がほとんど女性で、扮装のさい頭部に鬘をつけることからの呼称で、その特徴はいわゆる幽玄の情趣がもっとも強調され、序之舞（大小鼓・太鼓有無の別）・中之舞（同前の別）といった抒情性に富んだ舞が舞われることである。

といっても序之舞物がその大半以上の二十九番を占めており、中之舞物は僅か七番で、「源氏供養」では、イロエという舞事がこれにあたり、また、舞のない鬘物の能として「大原御幸」がある。

鬘物といえば、いわゆる五番立て上演形式の場合、その真中にすえられるので三番目物とも呼ばれているが、序破急五段の原則からは破の中段として、一回の催しの中軸を成すグループであり、約四十余番がこれに属している。

その扮装は、老若・身分などによってまちまちではあるが、品位の高い女性の場合には、おおむね小面・若女・増女・孫次郎などの面（流儀によって異同がある）に摺箔・緋大口で、上に長絹とか唐織を壺折つぼおりにつけるなどする。そして前後場を通じ、多少の扮装は異なっても面の変わらないのが鬘物の特徴である。

また、主人公（シテ）が若い女でない場合は、深井または曲見しやくみの面（中年の女性）、老年の女性ならば、姥・老女・瘦女・小町・檜垣女などの面をつけることになっている。

四番目物

脇能物・修羅物・鬘物と切能物を除く雑多な主題と曲趣を有するグループで、雑能とも呼ばれ、現行曲の大半に近い九十数番がこれに属するが、中には脇能物や二番目物（修羅物）・三番目物（鬘物）・切能

物に準ずる曲も多々ふくまれている。

また、神・男・女・狂・鬼という分類の名称からもみられるように、狂女物が多いのもこのグループの特徴で、斑女・雲雀山・水無月祓・加茂物狂・飛鳥川・玉鬘・浮舟・三山・桜川・三井寺・柏崎・蟬丸・隅田川・花筐・籠太鼓・百万・卒都婆小町・富士太鼓・梅枝などが女物狂としてあげられ、男物狂としては芦刈・高野物狂・歌占・弱法師・木賊・土車の数番があり、他にも遊狂・遊楽物、執心・怨霊物、人情物、現在物などと分類されており、シテが仮面を用いない直面^{ひたかん}の曲が多いのも四番目物の特色である。

切能物

正式な一回の上演形式の切り（終り）に上演されるところからの呼称で、五十数番があげられる。神・男・女・狂・鬼の分類の鬼にあたるように鬼神・鬼畜物の曲の多いのがこのグループの特色で、文字通りの五番目物であり、序破急五段の原則からは急の能である。

このグループには、四番目物について雑多な曲が多く含まれ、働物・早舞物・特殊の舞事物・祝言物などに大別することが出来るが、後シテの仮面も、それぞれのシテの性格によって全く多様であり、おおむね竜神・怪神は黒髭・小飛出又は猿飛出の面であり、天狗は大癡見、鬼神は小癡見、鬼畜は顰^{しかみ}などとなっているが、一様にはいえない。